



農業と赤とんぼの共存が大ピンチ 「ふるさと自然の会」の調査が実った



長崎県内で唯一ミヤマアカネが生息している世知原町開作の棚田。



「ふるさと自然の会」メンバーとサポーターが今年も棚田で収穫作業に励んだ。

人目にふれにくい地味で地道な市民活動がある賞を受賞した。長崎県内で世知原町の棚田にしか生息しない絶滅危惧種となった赤とんぼ(ミヤマアカネ)の調査、保全に取り組んでいる「ふるさと自然の会」の報告が、国連生物多様性の10年活動の一環として開かれている『生物多様性アクション大賞2016』の「まもろう部門」で評価を受け入賞した。「目立たないし、苦勞が絶えない活動だけに、初めて公の場で認めてもらった喜びは大きいです。会の励みになりますね」と語るのは同会会長の川内野善治さん(69歳)。

自然調査や自然体感会を通して後世に豊かな環境を残していこうと、カノコユリなどの保全活動も実施し、成果を上げてきた。そんな中、最も大きな課題となったのが7年前から調査を本格化したミヤマアカネだ。

以前は夏の田園風景と同化していたトンボがなぜ急激に姿を消したのか? 近年はなぜか幼虫が水漏れの多い昔からの棚田にしかないことが分かった。調査を進めていくと、世知原町開作地区で10年ほど前に行われた水路の取り替え工事で生息地一帯の水田が一年間休耕になった時期から激減。水田に生み付けられた卵が全て死滅したのだ。

「水路の取り替えがなかった棚田だけにミヤマアカネが生き残ったんです」

ところが棚田の地主さんが亡くなり、休耕田となることに。ミヤマアカネの最後の砦ともいえる棚田がなくなると絶滅に拍車がかかる。川内野さんをはじめ、会のメンバーは苦渋の末、自ら約4



■川内野善治さん/佐世保市生まれ。ふるさと自然の会会長、環境省自然公園指導員、環境省希少野生動物植物保存推進委員、長崎県自然環境監視員などを務めている。

ヘクタールの棚田を借地し、米作りを継続。ミヤマアカネ個体群維持と周辺水田への分散を試みた。

しかし、棚田以外の水田にいくら分散しても成果は上がらなかった。そこに稲作の生産性を向上させるために推進されている農業の存在が浮かんだ。箱苗剤として多くの生産者が使用しているネオニコチノイド系農薬が水漏れする棚田と比べ、トンボの幼虫への毒性が強く働いていたのだ。

「皮肉なことですが、ミヤマアカネは一番手間がかかる昔ながらの棚田としか共存できなくなっていたんです。私たちが稲作を辞めれば絶滅するんです」

複雑な表情を見せる川内野さんののは、トンボだけでなく、カエルなど日本の田園や里山とセットで生きてきたハ虫類、両生類など普通にいた生物が急激に姿を消していると呟く。

そこには農業問題だけではなく、高齢化、後継者不足に悩む農業自体の変化が大きな要因となっていたのだ。全国各地で猪や熊が人里に姿を表す騒動が多発する昨今。「日本で一番美しいトンボ」の代名詞を持つミヤマアカネが、稲作文化と人の営みと同調しながら生存してきた二次的自然界の危機を伝えるまっ赤なシンボルに思えた。